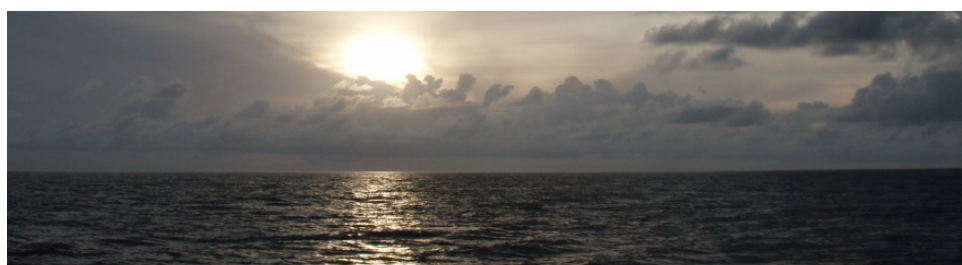


ISSN 2187-0926

Open Journal of Marketing

2019.1



易経についての考察

About the Changes

水越康介 首都大学東京 ビジネススクール

Kosuke Mizukoshi, Tokyo Metropolitan University, Business school

第1節 易経を知ること

日常における意思決定は、偶然でもあれば、必然でもある。全てが偶然であるとすれば、その一貫性は見いだせないが、都度正解を得られる勘のようなものが重要になる。逆に、全てが必然としてあるのならば、もはやそれは自由意志にもとづく決定ではなくなるが、その運命を知ることが重要になる。運命は運だが、同時に運は、勘のようにも理解される。運があるとは、運命があるという意味でもあり、偶然の中でうまく生きられるという運の良さでもある。つまり、意思決定における偶然性と必然性は、必ずしも両極端というよりは、同じく運という言葉の中で理解されてきたといえるように思われる。

以下では、こうした偶然性と必然性の中での意思決定を考えるため、易経を取り上げる。言うまでもなく、易経は四書五経の一つにして、占いの書であるとともに思想の書である(本田, 1997, 金谷, 2003)。元来、占いは偶然の中にあるのではなく、むしろ必然の道を指し示すと考えられてきた。その一方で、占いが示す必然の道は、当たるも八卦、当たらぬも八卦が示すように、今日にあってはもちろん、その当時であっても偶然として理解されることもある。すなわち、偶然性と必然性は、占いにおいて両極端でありながら結びついている。

易経が示す卦は全部で六十四あり、十翼としてそれぞれの卦の特徴が様々な形でまとめられている(『易経(上)(下)』)。この全体像を捉えるためには、まずは十翼の

中でも序卦伝から始めるのがよいとされる(黒岩, 2012)。序卦伝では、六十四卦が易経の配列に従いながら、上篇と下篇に別れ、それぞれの特徴が繋がりを持って要約された形で書かれている。本稿においても、序卦伝をたどることを通じて、偶然性と必然性の中の意思決定を考えることにしたい。

第2節 序卦伝上篇

易経の始まりは乾为天である。六爻すべてが陽からなる特別な卦である。天地有りて、然る後に万物生ず。乾为天は文字通り天を意味し、ここから万物が生まれる出発点となる。天に続くのは、もう一つの出発点である地である。坤为地、天地の間に盈つるものは唯だ万物なり。地は、天の逆であり、六爻すべてが陰からなる。陰とは決して不吉な意味ではなく、消極的で受け身であることを示し、天を受けて万物を育む。

万物の生成は、水雷屯へとつながる。天地の間に盈つるものは唯万物なり。故にこれを受くるに屯を以てす。屯とは盈つるなり。屯とは物の始めて生ずるなり。屯は草木が初めて芽を出した時を示し、伸び悩みの時期でもある。同様に、引き続き生まれたての状態は山水蒙、幼稚でもある。物生じれば必ず蒙なり。故にこれを受くるに蒙を以てす。蒙とはくらきなり。ものの幼きなり。山水蒙では、爻辞において三たび占えば穢れるともされ、易の一回性を示唆する。さらに幼きものは養われる。屯と蒙に続くのは、養われることを意味する水天需である。需は待つ、求めることも意

味する。物の幼きは、養わざるべからざるなり。故に之を受くるに需を以ってす。需とは飲食の道なり。

飲食はしかし、争い事の元となる。飲食には必ず訟有り。故に之を受くるに訟を以ってす。訟は訴訟を意味し、食べ物だけではなく、あらゆるものをめぐる争いごとを示す。天水訟において、天は上に向かい、水は下に向かう。向かう方向が異なり、争いとなる。卦において、これらの方向性は重要であり、ばらばらであれば相いれず、むしろ混ざることが良しとされる。ここから、争えば人が集まり戦うという事態にも進む。地水師が意味するのは軍隊であり、戦いを意味する。訟には必ず衆の起こる事有り。故に之を受くるに師を以ってす。師とは衆なり。

争い、集まる人々は、一方で結束を固める。水地比では、親しみが生まれる。衆は必ず比する所有り。故に之を受くるに比を以ってす。比とは比（した）しむなり。さらにこの卦では、五爻だけが陽であり、残りは全て陰となっている。五爻は天子の位を示し、中の位置にある。つまり、一人の指導者にみんなが従っている形を示す。なお、中は二爻と五爻の二つに対応し、二爻は陰、五爻は陽が中りとなる。比しめば必ず畜うる所有り。故に之を受くるに小畜を以ってす。多くの人々が集まり親しむのならば、物が蓄えられる。ただし卦は風天小畜であり、たくさんの物を留められるわけではない。そして物が集まれば、衣食足りて礼を知るの通り、礼儀が行われるよう

になる。物畜えられて然る後に礼有り。故に之を受くるに履を以ってす。天沢履には足で物を踏むという意味や、履くという意味もある。

礼節が行われるようになれば、安らかな状態が得られる。履みて泰、然る後に安し。故に之を受くるに泰を以ってす。泰とは通ずるなり。興味深いことに、地天泰では、地が上にあり、天が下にある本来とは逆の状態が示される。不安定のようにもみえるが、むしろ逆に、天はここから上に登ろうとし、地は下がろうとすることにより、相通じる。逆に、それぞれが正しい位置を占めてしまえば、天地否、塞がってお互いは通じなくなる。物は持って通ずるに終わるべからず。故に之を受くるに否を以ってす。

天地否に至っても、それで終わりというわけではない。むしろ、塞がってしまえば、今度は協同の機運が高まる。物は持って否に終わるべからず。故に之を受くるに同人を以ってす。天火同人が示すのは、天も火も同じく上に向かおうとして集まり、力を合わせるとのことである。さらに、人と同じくする者は、物必ず帰す。故に之を受くるに大有を以ってす。人々が力を合わせれば、大いなる所有につながる。火天大有では、水地比の逆となり、五爻だけが陰であり、残りは全て陽の卦からなる。天子は才能がないとされるが、しかしその才能のなさは、中庸として逆に多くの人々を引き寄せる力がある。

有つこと大なる者は、以って盈つるべからず。故に之を受くるに謙を以ってす。大

有は、しかしやがて欠けていくことに留意する必要がある。富めば富むほど、わが身を低くし、謙遜することが重要であるとされる。地山謙では、山が地の下にある、すなわち謙遜している状態を示す。謙遜は、下篇にある巽為風でも同様に語られる。いずれにせよ、わが身を低くしていれば、楽しむことができる。有つこと大にして能く謙すれば、必ず豫む。故に之を受くるに豫を以ってす。ただし、易経において、雷地豫の意味は必ずしも序卦伝のいう楽しむだけではない。繫辭伝では、あらかじめ備えること、さらに雑卦伝では、楽しみそれゆえに怠ることも意味する。

豫めば必ず随うこと有り。故に之を受くるに随を以ってす。随は従うことを意味し、悦び楽しむことで多くのものがそれに付き従う。沢雷随では、人だけではなく、時代や世相に従うことも意味する。とはいえ、従うことは腐敗への道でもある。喜びを以って人に随う者は必ず事有り。故に之を受くるに蠱を以ってす。蠱とは事なり。山風蠱が意味するのは、山に突き当たって吹き荒れる風であり、腐敗とともに改革の時でもある。

事有りて後に大なるべし。故に之を受くるに臨を以ってす。臨とは大なるなり。蠱による改革が進めば、高みに至る大なる時期となる。地沢臨が示すのは、高い所から低い所を見下ろす、臨むということである。さらに、物大にして然る後に観るべし。故に之を受くるに観を以ってす。観るは文字通りよく観るということであり、地沢臨と

は逆に、下から上を仰ぎみる。さらに、風地觀の四爻では国の光を観るとあり、観光の語源でもある。観るべくして後に合う所有り。故に之を受くるに噬嗑を以ってす。嗑とは合うなり。火雷噬嗑は噛み合わせるの意味を持ち、卦の形が口を示しているとされる。上の唇と下の唇として陽があり、間にも陽が挟まり、この妨害している物を噛み砕くことで合同に至る。

物は以て苟しくも合うのみなるべからず。故に之を受くるに賁を以ってす。賁とは飾るなり。ただ合うということはできず、そこには飾り立てることも必要になるとされる。山火賁には、美しいという側面と、逆に上辺の飾りという虚飾の側面の双方がある。飾を致して然る後に亨れば、則ち尽く。故に之を受くるに剥を以ってす。剥とは剥ぐなり。飾りは結局のところ行き詰まりになる。それは剥がれていくことになる。山地剥では、卦の中で一番上の六爻だけが陽であり、残りは陰となっている。下から陰の力が増すことで陽の力が衰えており、削ぎ落とされ、全てが陰に変わろうとしている状態を示す。

しかし、陰が強まって陽が衰えることは、やがてまた新しい陽が下から生まれる契機でもある。物は以て尽くるに終わるべからず。剥すること上に窮まれば下に反る。故に之を受くるに復を以ってす。地雷復では、今度は卦の中で一番下の一爻だけが陽となり、新しい始まりを示す。復すれば則ち妄ならず。故に之を受くるに无妄を以ってす。天雷无妄は真実を意味し、新しい始まりに

おける真実の様を示す。真実は、下篇の風沢中孚でも同様に語られている。真実の様は新たな蓄えを形成する。无妄有りて、然る後に畜わうべし。故に之を受くるに大畜を以てす。先に小畜もあったが、それ以上に今回は大きく蓄えることになる。

物畜えられて、然る後に養うべし。故に之を受くるに頤を以てす。頤とは養うなり。火雷噬嗑では口の中に物が挟まっていたが、山雷頤では上交と初爻だけが陽になっており、その間は陰でなにもない。すなわち内部は空虚であり、なんでも受け入れることができる。その他、水天需にも同様の養うの意があった。養わざれば則ち動くべからず。故に之を受くるに大過を以てす。沢風大過では物事は今や大いに過ぎてしまう。どんなに必要なものでも、過ぎてしまえば害ともなる。

物は以て過ぐるに終わるべからず。故に之を受くるに坎を以てす。坎とは陥るなり。坎為水は難卦の一つであり、川が重なって前に進めない様、穴に落ちて出られない様を示す。これを脱するには、中を得ている陽の力を信じる必要があるとされる。そして陥れば必ず麗く所有り。故に之を受くるに離を以てす。離とは麗なり。離為火では、火が何かについて燃えることから、離といいながらも逆に付くということを示す。直接離れることを意味するのは、下篇における風水渙である。

第3節 序卦伝下篇

序卦伝の前半では、天地有りから始まり、

万物が生じ、そこから良いことも悪いことも反転しながら絶えず続いていく運動が示されていた。人間万事塞翁が馬を連想させるこうした運動は、易経から見出される思想の一つである。例えば人が集まることで勢いも生まれまるが、それは同時に争いや腐敗も生みだす。しかし争いや腐敗は改革を促し、また新しい時代を切り開く力ともなる。世界は絶え間ないその繰り返しとしてある。

序卦伝の後半もまた、天地有りて、万物生じる後、さらに分化していく世界とその運動を捉える。天地有りて、然る後に万物有り。万物有りて、然る後に男女有り。男女有りて、然る後に夫婦有り。夫婦有りて、然る後に父子有り。父子有りて、然る後に君臣有り。君臣有りて、然る後に上下有り。上下有りて、然る後に礼儀、錯く所あり。

天地と万物はすでに序卦伝の前半で説明したことから、後半は男女が相感することを指す沢山咸から始まる。男女は相通じ、夫婦となる。夫婦の道は、以て久しからざるべからざるなり。故に、これを受くるに恒を以てす。恒とは久しきなり。雷風恒は、変わらず継続されることを意味する。この継続性は、頑固で変わらないということでない。正しい道を進むということが変わらないことであり、従ってそれは結果的に変化を受け入れることにもつながっている。

物は以て久しくその所に居るべからず。故に之を受くるに遯を以てす。遯とは退くなり。正しい道を進む限り、変わらずに

いつづけるということとはできない。天山遯では、上から4つの爻が陽であるのに対し、下の2つは陰となっている。これは徐々に陰が増えてきていることを示し、君子はその害を避けて隠遁する。しかし、物は以て遯るに終わるべからず。故に之を受くるに大壯を以ってす。遯はいつまでも続くわけではなく、やがてまた勢いが盛んになってくる。雷天大壯では、天山遯とは逆に、上から2つの爻が陰であり、残りの下の4爻は陽となる。君子の勢いは盛んになり、小人の勢いが衰えていくことを示す。

物は、以て壯なるに終わるべからず。故に之を受くるに晋を以ってす。晋とは進むなり。壯であることはその場にとどまることではなく、進むことを示す。火地晋は日が昇り進むことを意味し、卦も示すとおり、地の上に火(日)が上がっていく様を描く。ただし、進めば必ず傷つく所あり。故に之を受くるに明夷を以ってす。夷とは傷つくなり。進んでいけば傷つくこともある。地火明夷では、明るいことが傷つけられ、暗闇に陥る。先の火地晋とは逆に、地の下に火が置かれ、暗闇となっていることが意味されている。

外に傷つく者は必ずその家に反る。故に之を受くるに家人を以ってす。風火家人は家や家庭を示し、戻る場所となる。家に注目し、家をよく治めることは、ひいては国をよく治めることにもつながる。なお、家に帰ることは後の雷沢帰妹とも重なる。家道窮すれば必ず乖く。故に之を受くるに睽を以ってす。睽とは乖くなり。家がよく治

められなければ、食い違いが生じお互いが背く関係が生まれる。火沢睽は反目を示し、火は上に登ろうとし、沢は下に流れようとする。そして背けば難卦である水山蹇、いよいよ困難に突き当たる。乖けば必ず難有り。故に之を受くるに蹇を以ってす。蹇とは難なり。蹇はあしなえ、歩行が困難であることを示し、前は水や川に留められ、後ろは山に阻まれる。まずは止まること、無理に進もうとしないことが重要になるとされる。

物は以て難に終わるべからず。故に之を受くるに解を以ってす。解とは緩かなるなり。雷水解は解決であり、困難はいつまでも続くわけではなく、やがて解ける時が来ることを示す。水山蹇を乗り越えたということでもあり、前半でみた水雷屯の産みの苦しみも乗り越え、動くことを意味する雷がそれを止めてきた水の上に突き出た形でもある。しかし、それもまた無傷ではありえない。続く山沢損では文字通り減ること、失うことが示される。緩やかなれば必ず失う所有り。故に之を受くるに損を以ってす。誰かが失うことは、しかし誰かがそれを得るということでもあり、ここでは下のものが失い、上のものが得ると考えられている。卦としては、地天泰から、下卦である天の陽爻を一つ上卦の地の陰爻と入れ替えた形であるとされる。損はただ凶ではなく、孚、真があれば受け入れられる。この逆として、今度は風雷益が置かれる。益では、上のものが失い、下のものが得るとされ、むしろこのことは、結果として上のものが得るこ

ともつながるとされる。損して已まざれば必ず益す。故に之を受くるに益を以ってす。益して已まざれば必ず決す。今度は、天地否を元に、上卦の天から下卦の地に陽爻と陰爻を一つ入れ替えた形となる。故に之を受くるに夬を以ってす。夬とは決するなり。決するとは破れるということであり、溜めることの限界を示す。卦の形としても、沢天夬は天を超えて沢に水が溜まり、今にも溢れそうであることを示す。あるいは上爻だけが陰で残り5つはすべて陽となっており、全てが陽になる一步手前まできていると考えられる。

決すれば必ず遇う所有り。故に之を受くるに姤を以ってす。姤は遇うなり。天風姤が示すのは、決し破れた者がまた逢うということであり、思いがけない再会でもある。再会すれば、そこからまた人や物が集まり始める。沢地萃、物相い遇いて而して後に聚まる。故に之を受くるに萃を以ってす。萃とは聚まるなり。集まれば、さらに勢いも盛んになる。地風升が示すのは、進み上がることであり、風が意味する木が地の下にあることから種が発芽し、成長していくことを意味する。聚まりて上る者は、之を升と謂う。故に之を受くるに升を以ってす。

これまでどおり、登りすぎればまた行き詰ることになる。再び難卦の一つである沢水困にあたる。升りて已まざれば必ず困む。故に之を受くるに困を以ってす。沢の水が下に潜り込んでいて、あるべき所にあるべきものがない状態を示す。登って苦しんだのならば、今度は下に引き返すことこ

となる。上に困しむ者は必ず下に反す。故に之を受くるに井を以ってす。水風井の井は井戸を示し、人を養い、尽きることなく水を提供する。初心に帰るという意味もある。

井道は革めざるべからずなり。故に之を受くるに革を以ってす。井戸は綺麗に清潔を保つ必要がある。沢火革は変革であり、新しくすることを意味する。沢が火によって沸騰し気体が変わるように、大きく形を変える時である。煮炊きのイメージは、続く火風鼎に引き継がれる。物を革める者は鼎にしくはなし。故に之を受くるに鼎を以ってす。鼎は物を煮炊きする器のことであり、物を鼎に入れて熱することで、人が食べられるものに変化する。この鼎は宝物でもあり、天子の長子を取り扱う。続く震為震では、改革のために鼎を用いて動き回ることが示唆される。器を主る者は、長子にしくはなし。故に之を受くるに震を以ってす。震とは動くなり。先の沢火革、火風鼎、そして震為震と改革が続く。

物は以て動くに終るべからず。之に止まる。故に之を受くるに艮を以ってす。艮とは止まるなり。艮為山は山であり、動かないこと、不動を示す。山という卦自体が、上爻が陽であり、残りは陰である。陽が上に登りこれ以上進むところがなく止まっている状態を意味する。そして、止まればまた進み始める。物は以て止まるに終るべからず。故に之を受くるに漸を以ってす。漸とは進むなり。風山漸は漸進すること、少しずつでも前に進むことを意味する。進め

ば帰るべき所に帰っていくことになる。進めば必ず帰する所有り。故に之を受くるに帰妹を以ってす。帰妹とは、女が嫁ぐことを意味し、雷沢帰妹では征けば凶なりとされ、沢が悦び、雷が動くことで淫奔な性格を示す。

その帰する所を得る者は、必ず大なり。故に之を受くるに豊を以ってす。豊かとは大なるなり。帰るべき所があれば、物を豊富にすることができる。雷火豊は大きく盛んなことを意味するものの、盛んであればその後は衰えていくだけであり、十分な警戒が必要になる。大を窮むる者は必ずその居を失う。故にこれを受くるに旅を以ってす。火山旅では、本拠を失い放浪し、旅をすることが示される。山は動かないものの、その上で火は燃え移っていく旅人とみなされる。旅にして容るる所無し。故に之を受くるに巽を以ってす。巽とは入るなり。巽は風であり、どこにでも伏して入っていくことができる。巽為風は、わが身を受け入れてくれる所を求め、へりくだることを意味する。先にみた地山謙と似ている。

入りて後に之を説ぶ。故に之を受くるに兌を以ってす。兌とは説ぶなり。兌は悦ぶを意味し、兌為沢は沢の水で草木が潤い悦ぶことや、相互理解によるお互いの悦びを示す。悦びて後に之を散らす。故に之を受くるに渙を以ってす。渙は離るるなり。悦べば、やがて気持ちも緩み、物事は散乱していく。人や物が離れていくことが風水渙であり、統一ができない悪い意味でもあれば、悩みが散るという良い意味でもある。

物は以て離るるに終るべからず。故に之を受くるに節を以ってす。離れていけば、これを引き止め、引き締めることになる。水沢節は、区切りがありそこに止まることを意味する。沢に水が止まっている状態であり、水がなくなれば先の沢水困となる。

節して之を信ず。故に之を受くるに中孚を以ってす。物事に節度があれば、人はこれを信用するようになる。中孚が意味するのは真であり、風沢中孚は真ん中の三爻と四爻が陰、その上と下4つが陽となり、卵の形を示す。陰は空虚も意味し、心の中に私心がないということでもある。その信有る者は必ず之を行ふ。故に之を受くるに小過を以ってす。信用されている人は、人より過ぎたことを行ふ。雷山小過は、中孚とは逆に中央の三爻と四爻が陽であり、その上と下が陰となる。陰の方が数が多く、勢いを持っている状況であり、鳥の形でもある。小さな鳥が空高く上がり過ぎてしまっていることを意味する。

物に過ぐる事有る者は必ず済る。故に之を受くるに既済を以ってす。既済は事が既に成就していることを意味し、水火既済は全てが終わっている状態である。初爻から上爻まで、陽と陰が順番に並び正しく、中っている。完成された状態でもあるが、これ以上伸びることはなく、後は衰えるだけでもある。物は窮まるべからずなり。故に之を受くるに未済を以ってして終わるなり。物事は完成しない。火水未済は水火既済の逆であり、初爻から上爻までの位置が全て逆になっており、さらに火は上に登り、

水は下に降り交わることがない。何も済んでない状態だが、逆にいえば、ここから徐々に出来上がっていく可能性があるということ、序卦伝はこうして再び始まりを示して終わる。

第4節 人間馬事塞翁が馬

易経は、序卦伝をみるかぎり、生々流転する世界の循環を示すように思われる。その中でも、偶然性と必然性が折り重なっている。雷風恒が示すように、変わらないものは道であり、その道に従うかぎり、われわれの意思決定は逆に変化せざるを得ない。変化することもまた必然であるということはあるが、それは偶然の中に必然を見出そうとする人の思考パターンのようにもみえる。

占いとして易経をみるのならば、六十四卦のうちの一つが常に選択されることになる（もちろん、さらにここから大小陽陰をみるとともに、個別の卦の様々な意味を組み合わせて占うことになろうから、実際はより複雑にはなる）。その詳細を序卦伝は示すわけではないが（各爻の爻辞などは象伝を改めてみる必要がある）、だからといって、どの卦にあっても、何かしらの明確な答えを提示するわけではない。難卦とされる水山蹇や沢水困、あるいは坎為水にしても、だからといって端的に凶であり、運がないということとはできない。逆に、勢いを示す卦が出たとしても、それはそれは高みに登ることの危険を意味することもある。山沢損や風雷益もまた、そのまま損や益を示す

わけではない。ようするに、易経は個別にみても、やはりそれ自体としては生々流転の世界観を示し、道の重要性を説くのみであり、その解釈や意思決定は開かれたままであるように思われる。

後漢の管輅は優れた易者として知られるが、彼をしても十のうち七から八程度の中だったとされる（『正史三国志魏書IV』）。このことについて、管輅自身、道理として違うことはないが、占いを頼みにする人が事実の全てを伝えるわけではないためとする。すなわち、当たり前でもあるが、易経そのものが運命を示しているわけではなく、その運命のあり様は人々の固有な背景に依存しているわけである。

以上本稿では、易経における序卦伝を確認し、意思決定の偶然性と必然性を捉えようとしてきた。変化する世界そのものを示すようにみえる易経において、われわれの意思決定とどのようなものでありうるのか。引き続き検討していく必要がある。

参考文献

- 黒岩重人（2012）『易を読むために』藤原書店。
金谷治（2003）『易の話』講談社学術文庫。
本田濟（1997）『易』朝日選書。
高田眞治・後藤基巳訳『易経（上）（下）』岩波文庫、1969。
陳寿・裴松之著、今鷹真・小南一郎訳『正史三国志魏書IV』ちくま学芸文庫、1993。

Open Journal of Marketing, 2019.1

易経についての考察

水越康介 首都大学東京 ビジネススクール

ISSN 2187-0926

発行：私的市場戦略研究室

代表：水越康介

〒192-0397

東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京大学院経営学研究科経営学専攻

<http://mizkos.jp> info@mizkos.jp